成人中・後期の「死に対する態度」への知能の影響

○丹下智香子¹・西田裕紀子¹・富田真紀子^{1,2}・大塚礼¹ (非会員)・安藤富士子^{1,3}・下方浩史^{1,4}⁽¹⁾国立長寿医療研究センターNILS-LSA 活用研究室・⁽²⁾日本学術振興会特別研究員 (PD)・⁽³⁾愛知淑徳大学健康医療科学部・⁽⁴⁾名古屋学芸大学大学院栄養科学研究所

キーワード: 死に対する態度 成人中・後期 知能

Effect of intelligence to the attitude toward death in Japanese middle-aged and elderly

Chikako TANGE¹, Yukiko NISHITA¹, Makiko TOMIDA^{1,2}, Rei OTSUKA^{1,3}, Fujiko ANDO^{1,3}, and Hiroshi SHIMOKATA^{1,4}⁽¹⁾National Center for Geriatrics and Gerontology, ⁽²⁾JSPS Research Fellow(PD), ⁽³⁾Aichi Shukutoku Univ., ⁽⁴⁾Nagoya Univ. of Arts and Sciences

Key Words: Attitude toward death, Middle-aged and elderly, Intelligence

目 的

成人中・後期において、死の主題に取り組むことは重要な発達課題の一つとなる。しかしながら、我が国で死の主題の様相に関して実証した研究は少ない。そこで本研究は、成人中・後期における「死に対する態度」に知能が与える影響について、縦断的検討に基づき解明することを目的とした。

方 法

分析対象 「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究(NILS-LSA)」の第1次・第3次・第5次・第7次調査(約4年間隔)に参加し、1回以上、下記の2尺度の両者に回答した3776名(男性1878名、女性1898名。延べ人数は9035名。各参加時で40-91歳に分布、平均60.0±12.1歳。)を分析対象とした。

尺度 (1)死に対する態度: 死に対する態度尺度(ATDS-A; 丹下ら, 2013)を第1次・第3次・第5次・第7次調査で施行した。この尺度は「死に対する恐怖」、「死後の生活の存在への信念(民俗宗教的な死後存在の信念)」、「生を全うさせる意志(自殺の否定、最後まで生きる意志)」、「人生に対して死が持つ意味(生との関連で死を意味づけ)」、「身体と精神の死(QOLから死を位置づけ)」の5下位尺度から成る。(2)知能:

NILS-LSAでは全調査回でウェクスラー成人知能検査改訂版(品川ら, 1990)の簡易実施法(WAIS-R-SF; 小林ら, 1993; 知識・類似・絵画完成・符号の4下位検査)を施行し、推定IQ値を算出している。このうち、死に対する態度と同じ測定時期のデータを解析に用いた。

分析 死に対する態度各下位尺度を目的変数として、線形混合モデルによる分析を行った。説明変数として(a)初回答時の年齢、初回答時からの経過年数、推定IQ値、およびこれらの1次・2次の交互作用項を投入するモデルと、(b)初回答時の年齢、初回答時からの経過年数、これらの交互作用項、および推定IQ値を投入するモデルを用いた。(a)・(b)とも調整変数として測定時期と性別、変量効果として各対象者の切片と傾きを投入した。

結 果

(a)・(b)両モデルの分析結果のAIC値を比較したところ、「身体と精神の死」に関しては同程度(順に35143.6、35140.9)ではあったものの、5下位尺度いずれに関しても(b)モデルで低

値が示された。表に(b)モデルの分析結果(抜粋)を示す。推定IQ値の効果に焦点つけて述べると、推定IQ値の高さは「死に対する恐怖」と「死後の生活の存在への信念」には負方向、「人生に対して死が持つ意味」と「身体と精神の死」には正方向で関連していた。また、推定IQ値の高さと「生を全うさせる意志」の間には有意な関連性が示されなかった。

考 察

本研究では、「死に対する態度」に知能が与える影響について、縦断的に検討した。その結果、まず推定IQ値が死に対する態度各下位尺度の初期値だけではなく、その変化の傾きにも効果を持つことを想定した(a)モデルよりも、初期値のみに効果を持つことを想定した(b)モデルがより良い適合度を示した。このことから、知能は死に対する態度の「加齢変化」に影響するというよりは、「態度そのもの」と関連することが推察された。

また、死に対する態度の各側面と知能の関連としては、知能が高い場合、死を自己の人生の一部として意味づけた上で、現世において「より良く生きる」ことをめざしており、その結果として死への否定的な感情が低下していると解釈することができる。すなわち、同世代や親世代の人との死別体験が急増する成人中期や、自己の死を迎えるであろう成人後期に至る以前にも、人は「死」という主題に取り組み、認知処理を行っている部分があると考えられよう。

引用文献

小林・藤田・前川・大六 (1993). 日本版 WAIS-R 簡易実施法 日本文化科学社
品川・小林・藤田・前川 (1990). 日本版 WAIS-R 成人知能検査法 日本文化科学社
丹下・西田・富田・安藤・下方 (2013). 中高年者に適用可能な死に対する態度尺度(ATDS-A)の構成および信頼性・妥当性の検討 日本老年医学会雑誌, 50, 88-95.

【付記】本研究の一部はJSPS科研費25380913により行われた。

表 死に対する態度への推定IQ値の影響: 線形混合モデル(b)による分析結果(抜粋)

<固定効果の解>	死に対する恐怖			死後の生活の存在への信念			生を全うさせる意志		
	推定値	SE	t 値	推定値	SE	t 値	推定値	SE	t 値
初回答時年齢	-0.11	0.01	-10.96 ***	-0.03	0.00	-6.90 ***	0.02	0.00	5.83 ***
初回答時からの経過年数	-0.39	0.07	-5.36 ***	-0.07	0.04	-1.86	0.00	0.03	0.14
初回答時年齢×経過年数	0.00	0.00	3.75 ***	0.00	0.00	0.09	0.00	0.00	-0.72
推定IQ値	-0.01	0.01	-2.09 *	-0.01	0.00	-4.17 ***	0.00	0.00	-0.30
<固定効果の解>	人生に対して死が持つ意味			身体と精神の死					
	推定値	SE	t 値	推定値	SE	t 値			
初回答時年齢	0.04	0.00	7.83 ***	0.02	0.00	5.85 ***			
初回答時からの経過年数	-0.04	0.04	-1.11	0.02	0.02	0.97			
初回答時年齢×経過年数	0.00	0.00	0.60	0.00	0.00	-1.16			
推定IQ値	0.02	0.00	4.73 ***	0.01	0.00	4.68 ***			

注1: * $p < .05$ *** $p < .001$
注2: 測定時期・性別を調整変数、各対象者の切片と傾きを変量効果として投入した(記載省略)。